

ギフト

★
看護職部門
入選

【福島県・藤本順子】

に帰るね」

「私に何ができるのか？ 看護師である私にできることは？ 人としての自分にできることは何だろうか？」

彼女に出会ったのは、こんなことを考え始めた看護師5年目の春だった。彼女は、トライアスロンで鍛えた健康的な身体と弾ける笑顔で、いつも明るく病と向き合っていた。彼女は私を、時に娘のように、時に職業人として必要としてくたさった。

3度目の入院で、彼女は主治医からこう告げられた。「抗がん剤がでなくもならない。しかし体力ばかりが落ちて好きなことができなくなるかも知れない。私は一日一日を大切に生きてほしい」。主治医の心からの言葉に、彼女は涙をためた目で「ねえ、先生にこう言われたんだ。それってさ、そういうことだよね？」と私に問いかけてきた。「もうすぐ死ぬってことだよね？」

人間対人間の対話だった。目をそらすことはできず、2人で号泣した。しばらく泣いた後、彼女は顔を上げて宣言した。「決めた。家

在宅療養に移行した彼女を訪問したのは、2カ月が経とうとする頃であった。すでにウトウトしがちであったが、目が合うと、初めて出会った時と同じ、くもりのないとびきりの笑顔で迎えてくださった。自分は今こんなケアを受けてこういう物を食べ、家族はローテーションを組んでいつもそばに居てくれてとても幸せだと、ゆつくりとかみしめるように教えてくださった。形見分けのように、トライアスロンで入賞した時のメダルをいただきたい。そして最後にこんなギフト（言葉）をくださった。「私みたいに、自分で自分のことを決める人が増えるから、そういう世の中になるから頑張つてね。手伝つてあげてね」

それから10年後、私は彼女からのギフトを胸に、緩和ケア認定看護師となった。1人でも多くの方が、最期まで自分らしく生きることを支えるために。